旅立ちの儀

dandyy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅立ちの儀

【Ｎコード】

Ｎ６９２３Ｍ

【作者名】

ｄａｎｄｙｙ

【あらすじ】

「夏のホラー２０１０」参加作品です

私には名前があった。三浦知治（みうらともはる）、２８歳。既婚。都内の証券会社に勤める、ごくごく普通のサラリーマン。妻とは、去年の春、めでたく結婚した。同じ大学のサークル仲間で、交際は5年にも及んだ。

―あの日私は、休暇を利用してK山に来ていた。K山は、この冬の時期はとても美しい雪化粧で、訪れる観光客も多いのだと、耳にした。私は、夏のK山には何度も訪れたことがあった。なんせ、私は大学時代は山岳のサークルに入っていて、今の妻や、仲間たちとも度々登りに来たからだ。私にとってK山は、妻や、大学の仲間たちとの思い出が詰まった、いわば特別な、青春を思い出させてくれる場所だった。冬のK山は初めてだ。そして、1人で来るのも。実を言うと、本当は妻と2人で来る予定だったのだが、妻が突然、原因不明の高熱に魘（うな）され、私だけで来ることになってしまった。妻が寝込んでいるのに、薄情な奴だと思うだろう？仕方なかったのだ。なんせ、泊まりで来る予定だったので、キャンセル料がかかるくらいならと、私だけでも来たわけだ。幸い、現地に着いてから妻に連絡をしてみると、熱は下がり、今は普通だと言うのだ。本当に、出発の日に高熱とは、ついてないなと、私は妻に同情した。―K山に来た私は、まずは1泊した。都内からは特急列車に乗り、何本か乗り換え、バスで2時間。くたびれた。宿の窓から眺めるK山は、暗くてよく見えないが、堂々と聳（そび）え、シルエットだけだが、実に美しい。私は、この美しいK山に乾杯という意味で缶ビールを何本も開けていた。いやはや、妻がいたら、なんと小言を言われたことやら。アルコールは、強いほうではないのだが、私は山に来たら必ず飲む。儀式のようなものだ。不思議と、飲むと気持ちが落ち着く。まるで、山を見てはしゃぐ子供の私を、アルコールが落ち着かせてくれるように。―朝、起きると、外は雲1つない、快晴だったのを覚えている。8時に起き、宿の朝食を食べた。旅館の人に山の様子を尋ねた

が、最近はどうも荒れるらしい。だから、私はついてると言われた。こんな快晴は、ここ数日はなかったらしいのだ。浴衣を脱ぎ、ふと窓の外を見た。高く聳えるK山。雪化粧は、何度見ても美しかった。夏のK山しか見てない私にとって、これ以上新鮮な光景はなかったろう。宿を出た私は、ロープウェーで3合目まで向かった。さすがに、1合目から登ろうとは思わない。一応、最後まで登るつもりでいる。夏は荷物も少ないし、涼しいが、冬のK山は初めて。荷物も多いし、着ているものも違う。重い。とはいえ、冬場の山登りが初めてなわけではない。サークルなどで何度も登ったが、実に3年ぶり。夏に比べれば少ないほうだ。私は、ただ単に山を登るのが好きなのだ。途中で景色に見とれたり、写真を撮ったりはしない。この大地を踏みしめる感じ、この山の空気、そういった、感覚的なものが好きだ。頂上に着いたら終わりではなく、山を降りる感覚を楽しむのも山登りの醍醐味だと私は考えていた。—登り始めて2時間ほど。さすがに、1人で黙々と歩くのは堪える。酸素も薄い。ちょっとここらで休憩しようかと、私は、雪の積もる岩場に腰かけた。彼女と出会ったのは、そこだったと記憶している。—お疲れですね。彼女が最初に私に言った言葉だ。どうやら、ずっと私の後をついて歩いていたらしい。私は、ついつい登るのに夢中でまったく気付かなかったのだが。見るところ、華奢な体つきだった。服を着込んでいるのに、体のラインがよくわかる。—よくついてこれましたね、と私は率直な疑問を投げかけた。どうやら、彼女も昔は山岳部だったらしく、山登りは死ぬほど好きらしい。名前は大久保えり、22歳。どうやら彼女も1人でK山に来たのだと言う。白い透き通った肌が印象的だった。髪はショートで、胸はうちの妻とは正反対で小さい。それくらいが、パッと見た彼女の印象だった。私はサークルの中でも登るのが速い部類だったが、彼女も負けず劣らず速かった。それに、1人ではなにかと疲れるので、ここで会ったのもなにかの縁だと、一緒に登ることにした。とはいえ、私は無駄口を叩くのは好きではないので、黙々と歩いた。ちらっと後ろを見るが、彼女は

ぴったりとついてくる。女だと、侮っていたのかもしれない。少し止まり、聞いてみた。—何か昔、スポーツをしてたのか？彼女は答えた。—特には。と。生まれつき心肺機能が強いのだなと、私は思った。—やがて、私が先に限界がきた。少しは休まないと、休憩所まではもたないと判断し、私は、彼女に負けた悔しさと共に片膝をついて休んだ。彼女は私を心配してくれた。それどころか、自分のせいではないかとも言い出した。私を焦らせてしまったと思ったのだろう。私は、そんなことはない、と彼女に言った。見栄かもしれない。実際、1人なら、あんなにハイペースにはならなかったかもな、と思った。—私はその場でしばらく休んだが、彼女はすごかった。まったく止まることなく、どんどんどんどん先へと行ってしまった。私は、悔しい思いと同時に、情けなくもなり、果ては、いい女だなとまで思ってしまった。妻に惚れたのも同じ原理だ。山を愛する女を、私は好きになる質らしい。山好きに悪い奴はいない。私は、もう一度彼女に会いたくなった。会ってどうこうするわけではない。ただ、あれほど山好きな人に会えた喜びから、一緒に登りたいと思ったのかもしれない。山好きな人は、目を見ればわかる。彼女の目は、山を見る目ではなかった。山を通じて得られる何かを見ている目だった。目の前の物質にではなく、シャーマン的な何かを。—私は急いだ。あれほど速い彼女のことだ。もう、8合目、いや、9合目まで行ってしまったかもしれない。雪に足を取られそうになりながらも、一歩一歩踏みしめていく。……ふと、私は足を止めた。そして、頭の中が、この雪のように真っ白になった。—ここはどこだ？と。気付けば、雪は膝くらいまで積もっていて、自分でもどうしてこんな、暗く、目印1つない木々の茂る場所に来たのか、検討もつかなかった。夏に来たときには、こんな場所は歩いた記憶はない。すぐに、手持ちの地図を開いたが、どこだかわからない。たしか、6合目を過ぎたあたりだったのは覚えている。……なんてことだ。女を追いかけて、迷子とは。恥ずかしくて、こんな話、誰にも言えない。なんとか自力で元のルートに戻らねば—。そう思った矢

先、あろうことか、目の前から、あの、大久保えり、彼女が現れたのだ。私は、なぜか心がホッとした。迷子なのに。彼女はまず、―あなたも？と聞いてきた。どうやら、彼女も迷ったらしい。良かった、迷子は私だけではなかったと、妙な安心感と同時に、ますます彼女に好意を抱いた。―2人はなんとかして元のルートに戻ろうと、歩いた。が、旅館の人の言ったように、雲行きが急に怪しくなる。さっきまでの快晴が嘘のように、暗雲が立ち込めてきた。これはいかんと、急ごうとしたのだが、雪が深くてなかなか前に進めない。そこで私は、彼女に提案した。―これ以上動くのは危険だから、どこかで助けを待とう、と。彼女は猛反対してきた。―待っていて何になる。これから、ますます寒くなるのだから、早くしないと最悪凍死してしまう、と。もっともだが、私は、なんとか彼女を説得しようと試みた。が、彼女は頑として譲らない。さらに、雪が強くなる。普通に考えて、これ以上歩くのは不可能。下手をすれば、雪に埋もれたり、崖から転落してしまうかもしれない。私は、妻がいるのを承知で言った。―君を死なせたくはない、と。顔から火が出るかと思った。こんなこと、妻にも言ったことないのに。だが、この言葉で彼女は納得してくれた。まぁ、2人の会話は誰も聞いちゃいない―。私は開き直って考えた。助けを待つと決めたはいいが、寒さをしのげそうな場所は見当たらない。仕方なく、私は雪を掻き分け、小さな洞穴をなんとか2人分掘ることができた。雪が当たるが、風は幾分かしのげる。私の手はガチガチに震えていた。よく見ると、手袋が破けて、雪が中に入り込んでいた。寒さで手がうまく動かない。が、彼女はそんな私の手をぎゅっと握りしめてくれた。一旦は、いかんいかん、と振りほどいたが、彼女は、―それでもないよりかはマシです、と再三せがんできたので、私は身を任せることにした。2人で身を寄せ合い、小さな洞穴に身を潜めた。もし、妻が見ていたら、どう思うやら。最初はそんなことを考えたが、だんだんそんな思考もできないほど、寒さで感覚がなくなってきた。私は、男の意地というか、そんな感じのものが込み上げてきて、―大丈夫か？

と、彼女に聞いた。本当は、私のほうが限界に近かった。……すると、彼女は唐突にこんな話をしてきた。―2年前の、同じK山でのことらしい。その冬の寒い日は、珍しく朝から快晴で、A子が所属する山岳部のメンバー5人も、意気揚々と山を登り始めた。しかし、A子は思いの外登るのが遅く、リーダーのB子は、そんなA子を腹立たしく思っていた。ただ単に遅いのなら、B子も多目に見たかもしれないが、A子は前日、宿で遅くまで酒を飲み、騒いでいたようで、他のメンバーが止めるまで酒を飲むのをやめようとしなかった。A子にとって、山登りの前日の酒は格別で、儀式のようなものだったらしい。が、B子はそんなA子のだらしなさに腹を立てていた。結局、昼から登って、目標の8合目までは行けず、6合目の山小屋で夜を過ごすことになってしまった。山岳部のメンバーは、K山からの朝日を見に来たのだ。A子のせいで予定が狂ったと、B子はA子を怒鳴り付けた。周りは、仕方なかったと、B子を止めようとしたが、逆にA子が黙っていなかった。疲れもあってか、B子と激しく口論になる。B子は―あなたが遅れたせいで、朝日が見れなかったらどうしてくれるのよ！激しく詰め寄った。こうなれば、売り言葉に買い言葉。A子も散々に言われて黙っていない。―そんなに言うなら、今から先に登って待ってるわ！一同、閉口した。なんせ、外は真っ暗。吹雪いている。常識的に考えて、この寒さで、視界で登るなんて、自殺行為であろう。心配はしたが、B子は止めなかった。―なら、好きにすれば、と。ここまで言われてA子は引き下がるわけにはいかなかった。他の3人は止めたが、聞こうともせず、A子は山小屋を出ていってしまった。―明くる日、B子たち4人は、日がまだ昇らないうちに山小屋を出発した。だが、到底朝日には間に合いそうにない。登れて、8合目がいいところだろうか。4人は、A子は無事だろうかと心配しながら山を登る。必死に、せめて8合目で朝日を見ようと登っていた4人だったが、気付くと、正規のルートを外れ、知らない場所を歩いていたのだ。誰1人、今まで気付いていなかった。周りは木々で茂り、人影も一切ない。地図にも載

っていない。B子たちは一気に不安になる。携帯電話も、圏外で通じない。焦ったが、あろうことか、目の前から、先に出発していたA子が雪を掻き分けてやって来るのが見えた。B子を含む4人は驚いた。―どうして地図にも載っていない、携帯電話も通じないのに自分たちの居場所がわかったのかと、A子に尋ねる。返ってきた答えは、―あんまり遅いから、迎えにきてあげた。そう言うのだ。……数日後、山中で雪に埋もれるB子たち4人が、遺体で発見された。死因は、特定されていない。不思議と、凍傷は見られず、外傷もないからだ。さらに不思議なのは、一緒に登ったはずのA子が、まったく見つからないことだった。生きている可能性は低いが、何日経っても、遺体はおろか、遺留品すら見つかっていないらしい。――私は、彼女、大久保えりからこの話を聞き、ぞっとした。寒気に合わせ、何やら背筋が喰われるような、そんな感じに襲われた。だが、彼女は、あくまで昔話だと笑っていた。彼女は、こんな雪山にいるのに顔色1つ変えずに、ピンピンしている。私はダメだ。……3日後。ついに体の足の先から、頭の先まで、あらゆる感覚が失われてきた。それでも、わずかに瞼が開いていられたのは、横に彼女がずっといてくれたからだろう。帰ったら、まず、妻に謝ろう、上司に謝ろう……。私はそう決めていた。すると、急に目の前が、黄色い光で包まれた。彼女は言った。―助かりましたよ、と。ようやく家に帰れるんだ。私は、全身に力が戻ってくるのを感じた。そして、力強く、体を抱かれているのを……。―後でわかった話だが、大久保えりという女は、2年前、K山で行方不明になった女らしい。山岳部の仲間と一緒に来ていたが、ささいな喧嘩で仲間と別行動し、それ以降、彼女の姿を見た者はいないらしい。だが、その事実を、私の口からは話すことはなかった。なぜなら、私の体は、家に帰った時には、この山の雪のように冷たくなってしまったからだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6923m/

旅立ちの儀

2010年10月8日11時44分発行